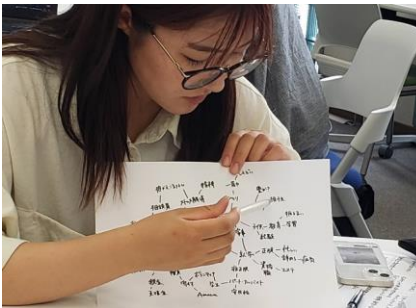




2022年度 トコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2023/9/29

団体名	NPO法人岡山NPOセンター	活動タイトル	学校を越えて地域学を支える民間機関の設立プロジェクト	
<p align="center">望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p>			<p align="center">■活動風景</p>	
<p>●地域の望ましい社会状況(ビジョン)</p>	<p>ビジョンは、すべての子どもが生まれ育った地域の良さやその社会システムを理解し、自らの意志で地域の中でのキャリアを見出せる社会。また、インターネット等で氾濫する情報の中で自分の軸を持ち、共助の気持ちを持てる社会である。小中高校そして大学とも連携しているソーシャルアクティブラーニングセンター（以下、SALCO）を設け、各地域で大人たちが自らの地域と仕事に誇りをもち、楽しんで暮らす中で、様々な大人や他者と接点を持ちながら子どもたちが生活している状態をめざす。</p>		<p>岡山県立大学「地域の社会問題を学ぶNPOインターンシップ」ふりかえり会</p>	 <p>活動をふりかえりマインドマップを作成。受入団体スタッフと意見交換をしながら、社会課題について理解を深めた。学生の話から団体の取組がイメージできるほど、自身の言葉でしっかりと説明をしていた。</p>
<p>●団体の社会的役割(ミッション)</p>	<p>岡山に根差し、現実の一步先の取組と仕組みづくりとして以下をめざしている。 1) 日本における持続可能なまち（地域）運営モデルの実現 2) 互いの個性を尊重し誰もが暮らしやすい未来型コミュニティの実現 3) 市民社会の担い手と共に育ち続けられる組織としての確立。 あくまで仕組みづくりが役割であり、今回も学校を越えて地域学や市民教育を支えるSALCOという仕組みをつくることで、様々なプレイヤーが学校と連携しながら、子どものために活躍できる状況をつくることを社会的役割として目指す。</p>			<p>写真2</p>  <p>ボランティアに「ボランティア活動を伝える広げる考える」</p> <p>活動について、目的や思い、活動しやすい環境など、様々な角度から活動をふりかえり、意見交換をおこなった。地域NPOでの活動で抱いている「まちづくりへの思い」を熱く語る高校生に、大学生が押される場面も。</p>
<p>●団体の活動基盤</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●人材：SALCOでコーディネーターを務める兼務職員が2名程度存在する。また、SALCOに関わり、学校へコンテンツ提供を行う民間組織が複数存在する。 ●拠点：学校を越えた放課後の場としての拠点が県内3エリアに1つ以上存在する。 ●資金：地元自治体、学校、民間組織などの複数の組織・財源からの資金でSALCOの運営が維持され、SALCOを通じて、民間の寄付などを財源とした給付型の奨学金なども提供されている。 ●情報：各学校とSALCOが円滑に情報を共有するための仕組みがあると共に、子どもたち個々の体験や経験が可視化されて蓄積される仕組みがある。 			<p>写真2</p>  <p>ボランティアに「ボランティア活動を伝える広げる考える」</p> <p>活動について、目的や思い、活動しやすい環境など、様々な角度から活動をふりかえり、意見交換をおこなった。地域NPOでの活動で抱いている「まちづくりへの思い」を熱く語る高校生に、大学生が押される場面も。</p>
<p align="center">■活動報告</p>			<p align="center">■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>SALCOの協力校・協力団体の開拓を目標に、以下に取り組んだ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 参加可能なプロジェクトの情報収集と提供：Line及びLINE WORKSを活用し、NPO・NGOインターンシップ・ボランティアの情報提供を行った。運用面の問題解消、効果的な発信、情報の質の担保を目的として情報発信ツールの再整理と検討を進めている。 2. モデルプログラムの開発(1)：個人の他、大学のゼミや企業からの相談に対応した。連携先とのマッチングをおこない必要に応じて活動中のコーディネート支援を担った。 3. モデルプログラムの開発(2)：県内4大学と協働し、NPO/NGOインターンシップ及びアクティブラーニングに取り組んでいる。新たに1大学とアクティブラーニングプログラムの企画実施に向けて調整中。 4. 活動基盤強化：組織内の共有会議は継続実施。地元紙でSALCOが紹介されたことにより1企業から活動相談を得た。昨年度打診したものとあわせて、2企業との取組を進めている。 			<ol style="list-style-type: none"> 1. 参加可能なプロジェクトの情報収集と提供：Line及びLINE WORKSの登録数は目標400名に対し220名。そのうち情報を活用したことを確認できた学生は86名(約40%) 2. モデルプログラムの開発(1)：マッチングしたものうち80%の団体・学生が、学びや理解を深めているという目標に対し、インターンや企画立案支援、団体からの相談対応等でマッチングし、成果を確認できたものは、5件中4件(80.0%)。 3. モデルプログラムの開発(2)：民間の力を借りたアクティブラーニング実施に対して理解している教員8名獲得という目標に対し、インターンシップを協働実施できた大学は2大学(教員2名)、アクティブラーニング実施(調整中含)は3大学(教員5名)。学生への情報提供で協力を得られる大学は約13大学(教職員約20名) 4. 活動基盤強化：組織内の体制強化を図り、SALCOの仕組みについて1以上の企業、もしくは自治体担当者が理解しているという目標に対し、2企業との連携が形になりつつある。 	
<p align="center">■事業を通じて得られたノウハウ</p>			<p align="center">■望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<ol style="list-style-type: none"> 1. 教職員との多様な連携の形 各大学との連携を探る中で、NPONGOインターンだけではなく様々なニーズがあることが見えてきた。ゼミ単位の学習を進めるためのフィールドを探しているケースや学内ボランティアセンターに対する支援、社会福祉士養成など既存プログラムの内容充実と繋げる工夫としてのNPOとの連携など、教員の専門領域や職員の担当部署ごとに、地域に寄せる期待があった。予算がつかずばかりではないが、様々な期待を切り口とした支援メニューを整備することで、大学とのネットワーク拡大に繋がるのではと考える。 2. SALCOの相談窓口で担うべき機能（個人・企業・大学） 相談者は個々に関心度や熟度が異なる。「既存センターが活動の入口を支えるならSALCOではその一步先を支える」といったように、県内の各機関が個々の強みを生かした機能を分担することで、活動の入口支援だけでなくその先の行動に繋がる支援を実現できると考えている。 			<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生が参画することの価値の明確化 これまでに実施したNPOインターンシップや企業との協働事例をもとに、学生が参画したことによる「価値」を可視化させたい。学生ならではの力が発揮されたケースや団体の活動を地域に開く後押しになったりなど一定程度の成果はあるが、事業として成立させていくには抽象度が高く説得力が低い。「学生に対する市民教育の機会提供」という団体や企業側の貢献意識に頼った連携ではなく、相乗効果を生み出す仕組みにできるよう、団体・企業側にもたらす価値について言語化を進めたい。 2. 支援コンテンツの整理 企業と学生との協働を進める上での「コーディネート」の価値整理が必要である。SALCOとして支援の柱は存在するものの、実際の支援事例との結びけが不十分である。実際の支援事例にもとづき成果を示すことでコーディネートの価値をわかりやすく伝え、企業・団体からコーディネートの依頼を受けられる体制づくりに繋げたい。 	
<p align="center">■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>			<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>●86名のLineの情報活用、●個別相談からのマッチングで80%の個人・団体で成果を確認、●協働する大学教員の増加、2企業と連携した取組が進行するなど、協力校/団体のさらなる開拓</p> <p align="right">を達成しました。</p>
<p align="center">■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			<p>SALCOでコーディネートを担ったインターンシップは、学生自身の学びやその後の活動に繋がるなどの変化を確認できた。団体側からはインターンシップそのものに対する提案をいただけるようになった。企業等との連携においては、スタッフがコーディネーターとしてかかわったことで、「企業側の学生理解」や「学生側のモチベーション向上」に繋がるといった変化を確認することができた。</p>	